

昭和五九年度国文学会活動状況

〈講演会〉 七月一日 寧靜館会議室

「日本における神話意識の展開」

黄 浪 江（檀国大学校）

文化学会後援

〈総会・研究発表会〉 一月二三日 寧靜館会議室

「重衡造型と平家物語の立場」

佐伯 真一（帝塚山学院大学）

「初期近松における遊女の発見」

鈴木 一夫（本学大学院）

〈講演会〉 一月二五日 神学館チャペル

「常陸坊海尊の話——贖罪の口承文藝」

野村 純一（国学院大学）

「国文学と民俗学」

白田甚五郎（国学院大学）

日本語・日本文化共同研究室共催

説話・伝承学会協賛

昭和五九年度卒業生卒業論文題目

柿本人麻呂の枕詞

——その独自性にみられる制作意識——

萬代 育 恵

磐姫皇后歌群

——連作的構成とその方法——

東歌を考える

——その民謡性と非民謡性——

山部赤人の吉野讃歌

高橋虫麻呂論 伝説歌の方法

万葉集卷二磐姫皇后歌の形成

——「イワノヒメ」を手掛かりにして——

防人歌の構造

——二態様をめぐって——

「舒明天皇国見歌」の性格をめぐって

密通事件をめぐって

源氏物語における「紫のゆかり」

光源氏物語における子供の役割

源氏物語における式部卿宮の姫君の本質について

土井 晴 子

後藤 秀 和

池田 保 江

西田 勝

小川 恵 子

大月 裕 子

東島 由 美

石村 隆 行

川村 節 子

那須 佳津子

「野分」における夕霧のまなざし

西村 智子

——その反乱性を中心に——

丹羽 久美子

『法華経』の哲理からみた『源氏物語』

大野 ゆか

貫之における和歌とその表現

佐賀 計子

平中物語の意味

——伊勢物語との比較による——

坂本 知子

桐壺更衣論

——その歌を中心に——

武雄 暢子

『源氏物語』須磨・明石巻の形成

——住吉の神をめぐる問題について——

吉田 のり子

『蜻蛉日記』の風景

——道綱母の心情を追って——

林 玲子

文献に見える記録と『源氏物語』の表現

——その考察から物語論に至るまで——

山寺 小夜子

養老伝承の中心部と再話

——今関信子「うばすて」論——

林 正輝

『源氏物語』の話者に関する考察

加古 有紀子

『伊勢物語』六・十二段と

浮舟についての伝承史的考察

神原 安子

中世「本地物」伝承論

春日 清彦

生産叙事歌の論理

——言語の呪力はいかに可能か——

福田 肇

陰陽師に関する説話とその背景

梶山 亨

『延慶本平家物語』における頼朝叙述の姿勢

——巻末「頼朝果報」の読みに関する一試論——

五十嵐 慶一

平家物語の女性説話の増補について

桂田 真理

『陸奥話記』における安倍氏

——その実像と虚像——

真鍋 佐知子

定家歌論の一考察

——「有心体」を中心に——

田村 稔

公的宗盛と私的宗盛の錯綜

——『延慶本平家物語』における

平宗盛の人物像の検討——

宇野 陽美

『太平記』における朝敵・尊氏像の消滅

延慶本重衡像の考察

山本 恭子

——寛一本と比較した場合——

藤原定家の幻想性

—— 文治・建久期を中心にして ——

山岡直子

都を通った平氏

—— 平家物語と都 ——

吉岡幹恵

近松と夕霧

—— 『夕霧阿波鳴渡』をめぐって ——

土橋幸代

「浅茅が宿」の主題

羽田野真理

近松世話浄瑠璃の方法

—— 時間設定と呼称をめぐって ——

服部啓子

「世間胸算用」にみる井原西鶴の人間観

堀井泰男

『好色五人女』の構成

飯野真子

芭蕉の生涯における作風の変化

—— 推敲回数が多い発句から ——

神尾明宏

『日本永代蔵』論考

加藤晴康

近松の世話浄瑠璃の中での心中物の特異性

川畑貴子

『好色五人女』「戀草からげし八百屋物語」

—— お七を中心として ——

菊川淑子

『好色五人女』「中段に見る曆屋物語」

におけるおさんの人間像

岸本浩子

『曾根崎心中』観音廻り考

—— その存在意義について ——

北川裕二

曾根崎心中の構成

小井土匡彦

近松門左衛門「堀川波鼓」

—— 「堀川波鼓」の女について ——

李正子

「日本永代蔵」の構造について

芭蕉の発句と漢詩文の関係

中西恵美子

説経「さんせう大夫」の諸本の性格

説経節『しんとく丸』考

並川公則

—— その構造分析 ——

野村淳子

『心中天の網島』における治兵衛

—— 改作との比較から ——

野村香織

『西鶴置土産』考

『世間妾形氣』の構造

酒井智佳子

『好色一代男』における俳諧師西鶴の散文意識

杉本洋子

『冥途の飛脚』について

—— 登場人物と『冥途の飛脚』をめぐって ——

高橋真理

『西鶴諸国ばなし』をめぐって

高本佳子

『西鶴諸国ばなし』をめぐって

谷川幸久

——「忍び扇の長歌」研究——

八木健次

「用明天皇職人鑑」二段目

——身替りを中心に——

水長敏明

近松世話物における女性たちについて

大塚力

『奥の細道』点描

中村達哉

『新生』小考

浅田かをり

島崎藤村「新生」論

江村公秀

有島武郎『石にひしがれた雑草』論

藤原由紀子

『生まれ出づる悩み』に見る有島武郎の姿

福島悦子

国木田独歩の小民観

早坂達二

——『窮死』を中心として——

田山花袋「蒲団」について

稲葉昌久

——作品成立の経緯とその意義——

徳田秋声『仮装人物』論

磯部好夫

——作品と作家主体について——

『其面影』にみる「家」観念の推移

磯田典子

——哲也の苦悩を中心として——

堀辰雄に関する「追分」論

槇山朋子

『黒い雨』論

三田小百合

『道草』論

——作者と主人公の距離について——

宮井尚子

飢えからエネルギーの浪費へ

——開高健の描写——

宮前博行

「雁」論

蜷川伸子

「或る女」論

岡本ルリ子

夏目漱石『明暗』論

大西史敏

「暗夜行路」試論

高田昌昭

「一握の砂」周辺の啄木短歌

田中壮太

太宰治「道化の華」作品論

——「大人」になりきれなかった大庭葉蔵——

横谷享子

新田次郎『アラスカ物語』論

鈴木育子

葛西善蔵にみられる「家庭」の意味

——妻に寄せる情を中心として——

徳弘佐和子

『彼岸過迄』論

江藤経史

安部公房『砂の女』論

古川貴俊

『羅生門』と『偷盜』

——「勇気」の問題を中心に——

橋本智宏

二葉亭四迷『其面影』論

——『くれの廿八日』が与えた影響を中心に——

石居昌也

「興津弥五右衛門の遺書」考

金子悟

啄木と自然主義

蟹江聡子

『破戒』論

高田康文

宮本輝『泥の河』の風景

脇坂進三

夏目漱石の「門」について

横田泰男

日本の漢語における漢字表記の交替について

正木肅子

幼児言語の特徴

松井浩美

上代語における居体言

玉村禎郎

伊勢物語の成立段階における昔男像の形式と変容

青木せつ子

中世芸能民の担ったもの

——説経『しんとく丸』を中心に—— 中村登

萬葉集における辞世歌

——仮託の方法—— 塚本真弓

「西住考」

山村孝一

昭和五九年度修了生修士論文題目

神託伝承考

——『三国遺事』を中心に——

岡山善一郎

常陸国風土記「祖神來訪伝承」考

辻村健治

『伊勢物語』考

——「歌語り」の方法——

井上史

『源氏物語』論

——准拠論再検討——

隅地伸子

『菅家後集』成立考

『平家物語』の構造

谷口孝介

——後白河院と清盛、安徳帝、および平氏一門の位相における対立史と系列化の方法——

谷村茂

近松初期作品に至る女性形象の発展

——舞曲から『出世景清』まで——

鈴木一夫

浄瑠璃史上における貞享期の問題

——加賀掾を中心として——

山崎睦也

漱石文学における後期「三部作」の研究

横光利一論

阿曾好

——「上海」までの軌跡——

小川直美

梶井基次郎論

——湯ヶ島時代の文学を中心に—— 田 阪 美 智

日本語・中国語における音象徴語の比較対照

陳 雪 瑛

昭和六十年年度国文学会活動状況

〈総会・研究発表会〉 一二月八日 寧静館会議室

「一字漢語についての語彙論的考察」

大島 中正（本学大学院）

「横光利一——『街へ出るトンネル』を中心に——」

小川 直美（金蘭会中高）

〈講演会〉 一二月一四日 至誠館4番教室

「シルクロードから来た説話」

池上 洵一（神戸大学）

文化学会後援

昭和六十年年度卒業生卒業論文題目

柿本人麻呂羈旅歌八首について 藤 原 美千代

旅の歌人としての入麻呂

——石見相聞歌の構想をめぐって—— 権 軒 清 美

万葉集の「問答歌」について

——部立の意義を考える——

入麻呂殯宮挽歌の考察

大伴坂上郎女における抒情の方法

和歌史における『万葉集』卷十出典不明

歌位置づけの試み

入麻呂歌集略体歌の位相

——民謡性の再検討——

古代中国の七夕伝承と和歌の融合

柿本人麻呂歌集七夕歌を中心に

「泣血哀慟歌二首」

——二歌群の連関性——

防人歌論

——場の問題を中心として——

防人歌の論

——官公的性格をめぐって——

山上憶良の七夕歌

その地上的性格について

入麻呂泣血哀慟歌の形成

乾 美和子

三輪 直美

森 田 泰子

中 原 達 公

岡 村 美 江

鈴 木 永 子

高 橋 瑞 枝

上 川 浩 二

山 本 浩 之

横 倉 浩 子

岡 野 寛

『古今和歌集』仮名序の「うたのさま六つ」論

小熊 江利子

増賀聖人伝承 その様式と構造

聖の物語類型

大月 昇

「平中伝承」論

『今昔物語集』に見られる平中像

島 牧子

△闘争Vの伝承についての一考察

古事記を中心にして

竹村 誠

「国見歌」考

その梓構造と様式性

神尾 登喜子

古代天皇とコトムケ

古事記における闘争の伝承を中心として

釘田 修吉

御伽草子論

竹内 俊之

浮舟の入水の構造

主に「中空に消ゆ」語の意味をめぐって

赤塚 和久

源氏物語における「泣く」ことの意味

——宇治大君の例——

浅野 英之

『源氏物語』におけるミヤコの意義

広瀬 範子

源氏物語宇治十帖における女一宮の意味

今村 有弘

源氏物語における朧月夜の呼称

井澤 由美子

『源氏物語』の語りの方法

——桐壺更衣の物語と光君——

亀田 真由美

薫造型における特性

——匂宮巻から総角巻を中心に——

木村 成見

源氏物語における「月」の空間構成について

近藤 敦子

源氏物語における楽の系譜

山嵜 早知子

浮舟の救いの可能性について

小野 恭裕

宇治十帖における橘姫の方法とその主題的意味

——柴舟の場面の分析を通して——

大内 理加

源氏物語宇治大君における「結婚拒否」

——「身」と「心」の葛藤——

佐々木 令

源氏物語の季節と死

——その例外性をめぐって——

宍戸 満智留

俗聖としての宇治八の宮

——人物と空間の位相——

住田 雅子

浮舟の「手習」の歌の方法をめぐっての一考察

津田 薫

『源氏物語』における夢の意義

塚田 淳子

大君の結婚拒否について

——大君の心情から——

植田 潤子

源氏物語における「ゆかり」と「形代」

海野 真弓

源氏物語における琴の呪力について

——宇津保物語との相異を中心として——

蔵本 直美

『源氏物語』における愛執の物性

福島 具子

『義経記』の構想

——主従関係にみられる論理——

川上 寛之

真名本曾我物語の故事

——三国列挙の方法を視点として——

平清盛の敵島信仰について

——『平家物語』における敵島関連説話——

前田 進

『梁塵秘抄』の物尽くしの歌

藪山 朝子

平家物語都落譚の構造

——延慶本と寛一本を中心に——

式町 都茂子

『平家物語』語り本系と読み本系の距離

——平氏栄花と悪行の論理をめぐって——

高橋 直子

梶原像の形成と展開

——判官・虫貞との関係より——

田崎 裕子

『心中万年草』論

原 純子

西鶴武家物作品における武家女性像

堀士 真美

『首根崎心中』をめぐって

——二つの道行——

加藤 鉄平

『心中天ノ網島』の方法

——「女のドラマ」の到達——

前田 一二美

『冥途の飛脚』

登場人物それぞれの性格分析

中村 俊裕

『女殺油地獄』論

岡松 和幸

『心中天の網島』について

——女同志の義理をめぐって——

奥田 朱加

『世間胸算用』における西鶴の方法について

鬼木 優子

『南総里見八犬伝』・毒婦考

—— 船虫をめぐるって ——

大野 咲子

『女殺油地獄』

—— 与兵衛と彼を取り巻く人々 ——

境 一彦

『心中天の網島』について

—— 近松の描いた「義理」を中心に ——

白井 浩明

『女殺油地獄』について

—— 研究史を中心に ——

竹村 麻美

『国性爺合戦』の成功について

—— 「日本」に関する語における

龍田 恵美

—— 三部作の比較を中心に ——

龍田 恵美

『大経師昔暦』論

—— その内在性と帰着点 ——

時本 代方香

『国性爺合戦』の方法

—— 日本をめぐるって ——

富井 弘之

『女殺油地獄』論

—— 登場人物をめぐるって ——

割方 尚子

近松の心中ものと階級制度

山田 由紀

『曾根崎心中』研究

山本 恒安

『好色五人女』研究

—— 「おせんとおさん」をめぐるって ——

足立 信之

『世間胸算用』について

—— 固有名詞と無名性をめぐって ——

加納 恵三

『出世景清』の研究

『雨月物語』における男性像について

坂本 真一

『雨月物語』における男性像について

高山 和子

大岡昇平『野火』論

織田作之助『可能性の文学』について

安藤 英昭

芥川龍之介『羅生門』をめぐるって

朝日 奈孝彦

川端康成著『雪国』論

—— 島村の役割分析を中心に ——

伴 敏雄

石川啄木「ローマ字日記」論

谷崎潤一郎『卍(まんじ)』論

小田 有香

梶井基次郎論

—— 「のんきな患者」を中心に ——

原田 真由美

福永武彦『死の島』論

東出 昌子

夏目漱石『心』

—— 先生の愛のかたち ——

飯田 浩幸

池田 真紀

香川 ちぐさ

「水晶幻想」試論

小林 由美子

徳田秋聲『仮装人物』論

小泉 美保

成島柳北『柳橋新誌』論

小島 一美

志賀直哉の文学について

古室 めぐみ

天外と秋田人その手紙から

今野 ゆかり

——友人・郷里を糧として——

芥川龍之介『藪の中』を中心として

熊野 由美

——歴史物から現代物への移行の時期に

島尾敏雄『死の棘』論

丸 昌子

「或る女」

森 永浩樹

——葉子が心よく思わない女——

島崎藤村『家』についての考察

村田 泰子

小林秀雄論 初期作品における言葉への疑い

中村 治

——亀井秀雄の論をとおして——

「われから」論

中村 泰子

——△愛▽と△金▽の構造を中心として——

島崎藤村『力餅』論

西田 喜久夫

——その特徴と意義について——

——

——

川端康成「千羽鶴」論

野川 嘉代

堀辰雄「菜穂子」論

小田村 博正

「にぎりえ」論

岡山 孝子

——お力の生と死をめぐって——

宮沢賢治『注文の多い料理店』論

寺田 多賀子

中原中也論

千々和 新

——中也の詩の持つ意味と独自性——

「虞美人草」の世界

堀 一郎

有島武郎の「思想の絶頂」

永田 浩子

荒畑寒村論

中嶋 勝

——小説形態の変化について——

「お伽草紙」について

吉池 透

『桜の実の熟する時』論

池上 佳嗣

吉行淳之介の文体

馬場 まさ代

——『砂の上の植物群』を中心に——

小説『細雪』における外来語

土井 いく子

『贋作吾輩は猫である』を

北尾 芳美

中心とした内田百閒の文体

大阪府における言語生活の社会的研究

——若い世代の使用語彙の現状報告——

南場 尚子

室町末期の漢語形容詞に関する一考察

穂田 涼子

『雨月物語』に於ける中国文学の影響

——「菊花の約」「夢心の鯉魚」

高知県宿毛市沖の島町母島の
あいさつ表現の考察

助村 隆

「蛇性の淫」をめぐって——

李 国勝

赤穂浪士事件劇化の成立過程について

——『碁盤太平記』をめぐって——

早川 久美子

昭和六〇年度修了生修士論文題目

古事記神話考

——伝承史的方法——

宮地 正司

竹取物語論

——伝承史的方法による

斑竹姑娘との比較研究——

卓 淑卿

延慶本平家物語における先行書承伝承引用の方法

——故事・縁起文をめぐって——

岩名 紀彦

谷崎潤一郎「少将滋幹の母」論

風呂本 薫

一字漢語についての語彙論的考察

大島 中正

現代日本語の条件表現

——バート・タラを中心に——

福西 弘美